

[成果情報名] 抑制カボチャの露地、無加温ハウス栽培

[要約] 平坦地の露地栽培、無加温ハウス栽培で栗系カボチャを11月上～中旬に収穫するための有望品種は「ダークホース」で、栽植密度は、露地の地這栽培が畦幅250cm、株間40cm、無加温ハウスの立体栽培が畦幅200cm、株間30cmを基本とし、いずれも親づる1本仕立てとする。

[担当] 総農セ・栽培部・野菜科・赤池一彦

[分類] 技術・普及

[課題の要請元] 農業技術普及部、中北・峡南地域普及センター

[背景・ねらい]

複合経営の補完品目として、果肉が粉質の栗系カボチャの晩秋期出荷が期待されているが、本作型での栽培は、着果数が少なく肥大もしにくいため安定生産が難しい。

そこで、11月上～中旬にカボチャを安定生産するための有望品種の選定および10a当たり収量を確保するための栽植密度について、露地の地這栽培と無加温ハウスの立体栽培についてそれぞれ検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 抑制カボチャの有望品種は、1株当たり着果数や10a当たり収量が多く、ほくほく感など食味が良い「ダークホース」である（図1、図2、表1）。
2. 露地の地這栽培は、8月10日まきで11月1日頃に収穫できる（データ略）。10a当たり収量が最も多い栽植密度は、畦幅250cm（床幅80cm、通路170cm）、株間40cmの1,000株/10a植えである。反収はやや下がるが1果重を増やしたい場合は、畦幅250cm、株間50cmの800株/10a植えとする（図3）。
3. 無加温ハウスの立体栽培は、8月20日まきで11月15日頃に収穫できる（データ略）。10a当たり収量が最も多い栽植密度は、畦幅200cm（床幅80cm、通路120cm）、株間30cmの1,667株/10a植えである。反収はやや下がるが1果重を増やしたい場合は、畦幅200cm、株間40cmの1,250株/10a植えとする（図4、図5）。

[成果の活用上の留意点]

1. 露地栽培、無加温ハウス栽培とも、カボチャの仕立て本数は親づる1本仕立てとする。
2. 露地栽培では、5節までの腋芽を除去し、以降親づるを伸長させ摘心はしない。親づるから出る子づるは放任でよい。果実の着果節位は20～25節である。
3. 無加温ハウス栽培では、腋芽は全て除去し、親づる1本を支柱と棚に誘引する。親づるは棚上で隣接する畦に届いたところで摘心する。果実の着果節位は18～20節である。
4. 施肥は、露地栽培、無加温ハウス栽培とも、CDU化成などを用いて3要素成分量が各15kg/10aとなるよう全面施用し、植え床には白黒ダブルマルチを用いる。

[期待される効果]

1. 良食味の栗系カボチャを、流通量の少ない晩秋～初冬期に出荷することができる。
2. 複合経営の新たな補完品目として、平坦地の野菜農家や果樹農家が導入可能となる。

[具体的データ]

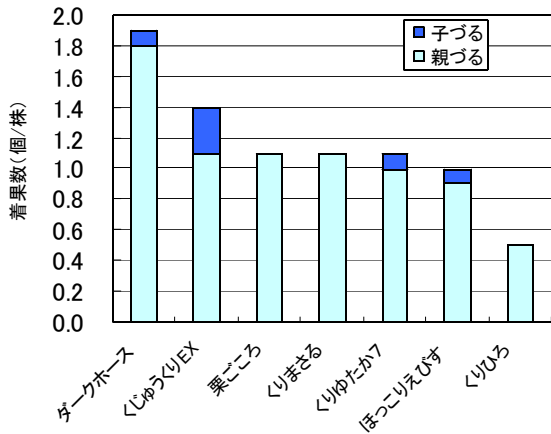


図1 露地栽培における各品種の1株当たり着果数 (2010年)

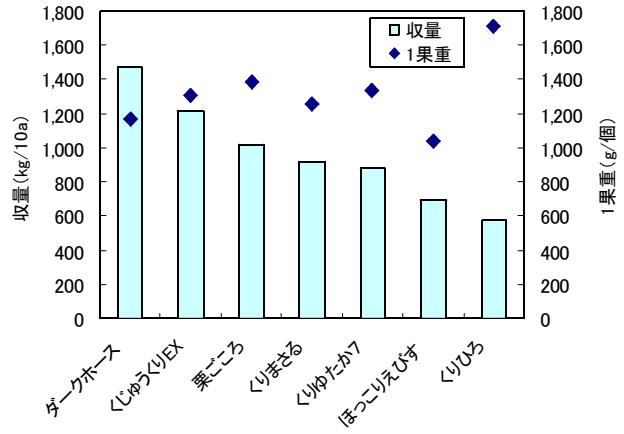


図2 露地栽培における各品種の収量および1果重(2010年)

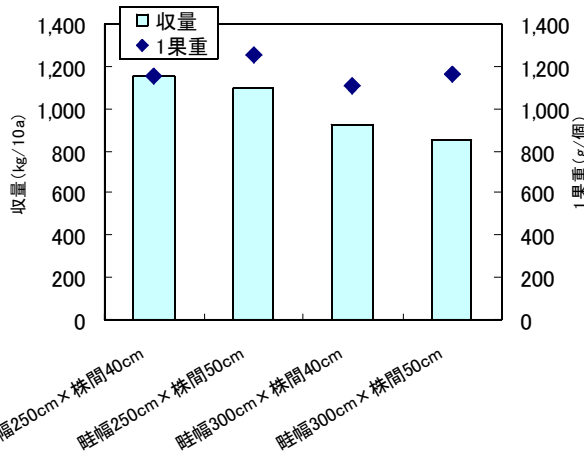


図3 露地栽培におけるダークホースの栽植密度の違いによる収量および1果重(2011年)

表1 露地栽培における食味^{z)}(2011年)

品種	ほくほく感	甘み
ダークホース	2.5	1.4
くじゅうくりEX	1.9	1.6

^{z)} ほくほく感(3:強~1:弱)、甘み(3:強~1:弱)(n=30人)
2品種とも収穫8日後の11月24日の数値。

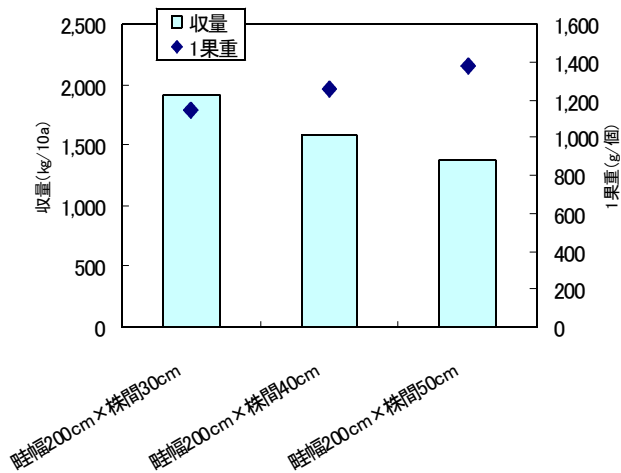


図4 無加温ハウス栽培におけるダークホースの栽植密度の違いによる収量および1果重(2011年)

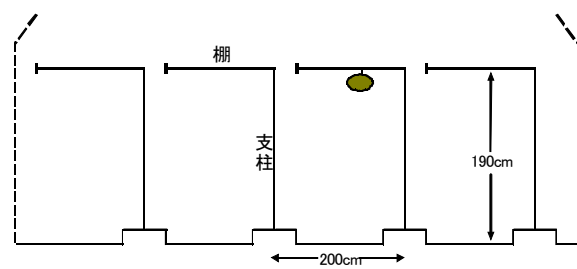


図5 無加温ハウスにおけるカボチャの誘引法

[その他]

研究課題名：平坦地における冬期を中心とした省力品目の作期拡大技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2010～2013年度

研究担当者：赤池一彦、小澤明子